

## 親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ<sup>1) 2)</sup>

——親子双方の視点から——

中村 真\*・松井 洋\*\*  
堀内勝夫\*\*\*・石井隆之\*\*\*\*

### Parent-child Relationships and Attitudes toward Delinquency in the Youth II

NAKAMURA Shin, MATSUI Hiroshi, HORIUCHI Katsuo, ISHII Takayuki

#### 要 旨

中里・松井(1997;1999)は、青少年の価値観、思いやり意識、親子関係などに関する縦断的な国際比較研究を行い、諸外国に比較して日本の若者の意識や態度が多くの側面において悪化していることを示した。また、その原因が親子関係の希薄さにあることを実証している。ただし、これらの知見は、親子関係の良否を子どもの視点から把握したものであり親の視点が反映されていなかった。本研究の目的は、親子関係の良否と子どもの様々な意識・態度の関連を親子双方の観点から検討することである。日本とトルコ共和国の中高生とその両親を対象に質問紙調査を実施した結果、子どもからみた親子関係の親密さが子どもの道徳意識、恥意識、愛他性、価値観に肯定的な影響を与えるとともに、自らの非行的態度の抑止に寄与していることを示唆した。そして、親からみた子どもとの関係の親密さも親の(子どもに関連した)道徳意識や愛他性に関するしつけを促すとともに、子どもの虞犯や非行を許容しない態度の形成に貢献することを示した。国際比較の観点では、トルコに比べて日本は、親子が互いに心理的に距離を置いており、それが中高生の意識や態度に好ましくない影響を与えていることが示唆された。

キーワード：親子関係、心理的距離、非行的態度

---

\*助教授 社会心理学

\*\*教授 社会心理学

\*\*\*産業能率大学

\*\*\*\*非常勤講師 日本・精神技術研究所

## 問題と目的

周知の通り、近来の我が国の青少年による非行は悪化の一途をたどっている。主たる悪化の内容は、年少少年による非行の凶悪化や女子による発生件数の増加に見てとれるように、低年齢化および質的・量的な悪化である。特に、性非行や高校生による覚醒剤などの薬物使用は増加傾向にあり、非常に憂慮すべき事態となっている。

非行悪化の背景には、青少年を取り巻く社会環境の変化など、さまざまな要素があると思われるが、親子関係の希薄化もその一つであり、かつ多大な影響を及ぼしているものと考えられる。

われわれは1980年代後半より我が国ならびに米国、中国、韓国、トルコ共和国などの中高生を対象に、非行許容性や価値観、親子関係といったさまざまな意識・態度に関する国際比較研究を継続して行っている。それによると、他国に比較して我が国の中高生は非行に対して許容的であり、その傾向は年を経るごとに顕著になっている。また、両親に対する心理的距離は、他国に比べて圧倒的に遠い。つまり、子どもからみた親子関係が極めて希薄なのである。しかも、親との心理的距離が遠い子どもほど、非行に対して許容的であることが統計的に確かめられている（中里・松井, 1997; 中里・松井, 1999; 中村他, 2002; 中里・松井, 2003; 中里他, 2003; 中里他, 2005; 中村他, 2004; 松井・中里他, 2005; 中村他, 2005)。

これらの知見は、親子関係が親密であるほど、子どもは非行に対して抑止的な態度を形成することを示唆する。そうだとすれば、従来の子どもからみた親との心理的距離に併せて、親からみた子どもとの心理的距離を測定する必要があるだろう。なぜならば、親子関係の良否をどちらか一方の見方ではなく、両者の視点で総合的にとらえることによって、親子関係と非行的態度の関連をより正確に把握できると考えるからである。

本研究の目的は、子どもの非行的態度の形成に及ぼす親子の親密さの影響を親子双方の観点から明らかにすることである。併せて、非行的態度の背景となる思いやり意識、道徳意識、価値観、恥意識などと、親子関係とのあいだの関連性についても検討する。これによって、青少年の非行的態度を抑制するための望ましい親子関係のあり方を親子双方の観点から提言することができると考える。

なお、本研究では、親子関係と非行的態度の関係をより明確にするために、日本国内のほか、比較対照群として、われわれの従来の研究によって親子関係が極めて良好であることが確かめられているトルコ共和国における調査も実施する。

## 方法

### 【調査方法】

#### ①中高生の調査

事前の調査依頼に対して承諾が得られた各学校に質問紙を送付し、本研究の共同研究者が分担して、クラス単位で集合調査を実施した。あるいは、ホームルーム等の時間帯を利用してクラス担任の教員に集合調査を実施していただいた。

#### ②両親の調査

親を対象とする質問紙を中高生に持ち帰ってもらい、家庭で父母（個別）に回答してもらった。後日、生徒を介して学校で回収した。

### 【質問紙の構成】

質問紙の構成は以下の通りである。

#### ①中高生の調査

中高生対象の質問紙は、父との関係（4件法，14項目）、母との関係（4件法，14項目）、非行許容性（4件法，10項目）、道德意識（4件法，9項目）、愛他性（4件法，8項目）、価値観（4件法，12項目）、恥意識（4件法，25項目）に関する質問およびフェースシートで構成された。

#### ②両親の調査

親を対象とする質問紙は、子どもの非行に対する許容性（4件法，10項目）、子どもとの関係（4件法，15項目）、道德意識（4件法，10項目）、愛他性に関するしつけ（4件法，4項目）、に関する質問およびフェースシートで構成された。

### 【調査対象者】

調査対象者は、日本およびトルコ共和国の中高生 1515 人（性別不明者を除くと 1488 人）と父母 1814 人であった。日本の調査地区は、北海道、青森県、岩手県、茨城県、静岡県であった。トルコ共和国の調査地区は、都市部のイスタンブールと地方都市のチャナッカレであった。内訳は表 1 と表 2 の通りである。

### 【調査期間】

調査期間は、2004 年 9 月～2004 年 12 月であった。

表 1 調査対象者数の内訳 (生徒)

	日本			トルコ			計
	男	女	計	男	女	計	
中学	195	207	402	100	80	180	582
高校	487	158	645	120	141	261	906
計	682	365	1047	220	221	441	1488

表 2 調査対象者数の内訳 (父母)

子の属性	日本			トルコ			計
	父	母	計	父	母	計	
中学	208	274	482	135	140	275	757
高校	295	315	610	215	232	447	1057
計	503	589	1092	350	372	722	1814

## 結果と考察

ここでは、本研究において得られた多くの研究成果を次の2つの側面別にまとめた。まず、子どもを対象とする調査結果に基づいて、子どもからみた親子関係、非行許容性、道徳意識、愛他性、恥意識、価値観の結果を述べる。そして、親子関係と他の意識・態度との関連性、および、非行的態度の形成に及ぼす諸変数の影響について、日本とトルコ共和国を比較しながら検討する。

次に、親を対象とする調査から、親からみた子どもとの関係（親子関係）、子どもの非行に対する許容性、子どもの振る舞いに関する道徳意識、子どもへの愛他性に関するしつけの程度、の結果を述べる。そして、これらの諸変数に及ぼす親子関係の影響について、日本とトルコ共和国を比較しながら検討する。

最後に、本研究の目的の根幹をなす親子関係と子どもの非行的態度の関係について、親子双方の観点から総合的に考察する。

### (1) 親子関係と子どもの意識・態度 (子どもの視点から)

#### (1)―1 子どもからみた親子関係

子どもからみた親子関係の良否を掌握するために、心理的距離尺度のうち、『父(母)はなにかと私に相談する』、『父(母)とはうまくいっている』、『父(母)を尊敬している』、『父(母)は私に期待している』、『父(母)のようになりたい』の5項目を用いた。これらは、われわれが継続して行っている国際比較研究において一貫して用いてきた項目ある。それぞれの質問項目に対して「そうである」～「まったくそうではない」の4件法で尋ねた。つまり、各項目を肯定する度合いが高いほど、子どもからみた親子の心理的距離が近いことを意味する。尺度の信頼性係数も比較的高かった(父： $\alpha = .788$ ，母： $\alpha = .782$ )ので、それぞれ一次元性があるとみなし、以降の分析ではこれら5項目の合成得点を父母に対する心理的距離得点として用いた。

表3 両親に対する心理的距離の平均(標準偏差)

		父との距離	母との距離
日本	中学男子	2.58 (.64)	2.52 (.68)
	中学女子	2.76 (.59)	2.28 (.66)
	高校男子	2.67 (.64)	2.56 (.66)
	高校女子	2.52 (.56)	2.13 (.66)
	計	2.65 (.62)	2.44 (.68)
トルコ	中学男子	1.70 (.49)	1.68 (.46)
	中学女子	1.72 (.52)	1.44 (.43)
	高校男子	1.78 (.57)	1.73 (.52)
	高校女子	1.81 (.50)	1.62 (.42)
	計	1.75 (.52)	1.64 (.47)
全体		2.38 (.72)	2.20 (.72)

※ 値が小さいほど心理的距離が近いことを示す

表3は、父母に対する心理距離得点の平均と標準偏差を国別・中高男女別に示したものである。全体的に見ると、両親との心理的距離はトルコよりも日本において圧倒的に遠い。これは、子どもから見た親子関係が日本において非常に希薄であること、トルコにおいて親密であることを示すものであり、我々の従来の研究と一致するものである。

日本とトルコの中高生に共通する傾向として、親に対する心理的距離は、父親よりも母親のほうが近い。また、女子が同性である母親に対して心理的距離が近くなる一方で、男子ではそのような傾向がみられない。中学と高校を比べると、日本の女子だけが学年の進行とともに両親に対する心理的距離が近くなっているが、日本の男子およびトルコの男女では、むしろ、中学生から高校生にかけて親との心理的距離が僅かながら遠くなっている。

表4 父母との心理的距離の遠一近群(人数)

		近群	遠群	計
父との 心理的 距離	日本	286	678	964
	トルコ	360	52	412
	計	646	730	1376
母との 心理的 距離	日本	451	567	1018
	トルコ	388	34	422
	計	839	601	1440

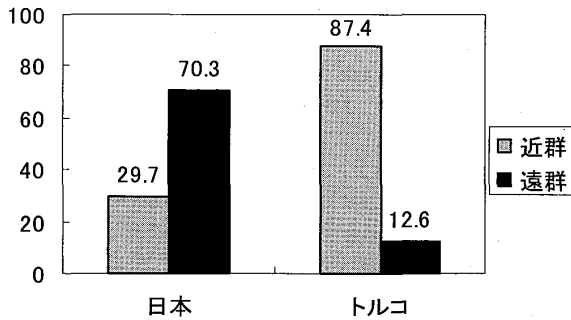


図1 父親との心理的距離 (%)

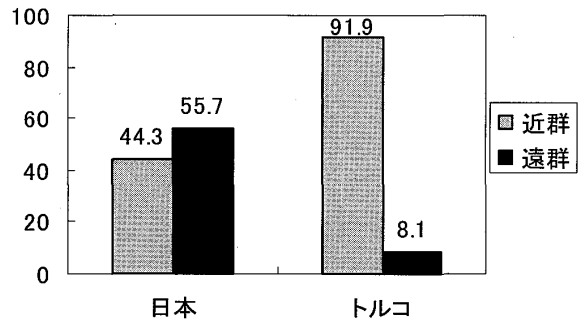


図2 母親との心理的距離 (%)

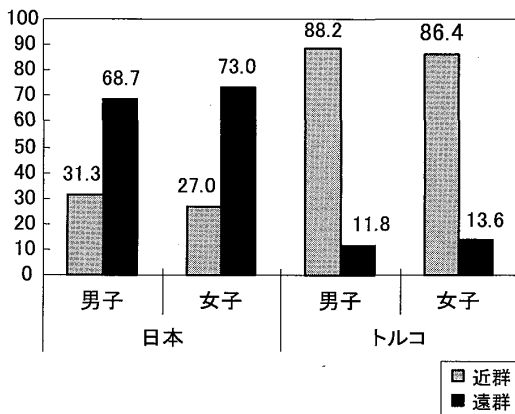


図3 父親との心理的距離 (%)

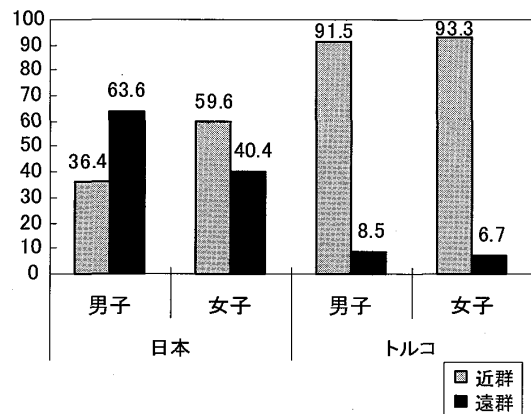


図4 母親との心理的距離 (%)

次に、調査対象者全員（中高生）について、父親および母親に対する心理的距離得点を算出し、それぞれの平均点を境に近群と遠群に分割した。表4は、父母に対する心理的距離の遠—近群の度数を示したものである。図1～図4は、これに基づいて、父母に対する心理的距離の遠—近群の割合を国別・男女別に比較したものである。トルコでは、両親に対する心理的距離が近い者の割合が9割前後を占めているのに対して、日本では、実に7割の中高生が父親に対する距離が遠く、母親に対する距離の遠群も5割を超えている。

(1)—2 子どもの非行許容性と親子関係

子どもの非行許容性を以下に述べる10項目を用いて測定した。具体的には、それぞれの質問項目に対して「非常に悪いことだ(1点)～「たいしたことはない(4点)」の4件法で尋ねた。つまり、得点が高いほど非行に対して許容的であることを意味する。

図5と図6は、両親に対する心理的距離の遠—近群ごとにみた非行許容性得点の平均を国別に示したものである。ここでは、非行許容性を掌握するために3つの指標を用いた。まず、全10項目の平均点を非行全体に対する許容性とし、『タバコを吸う』、『酒を飲む』、『エッチな雑

親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ

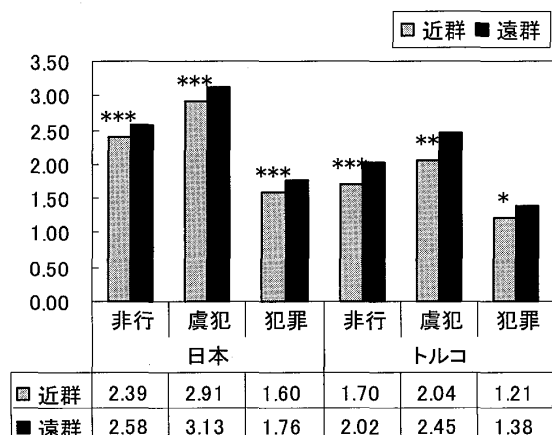


図5 父親との心理的距離の遠近群ごとに見た非行・虞犯・犯罪への許容性

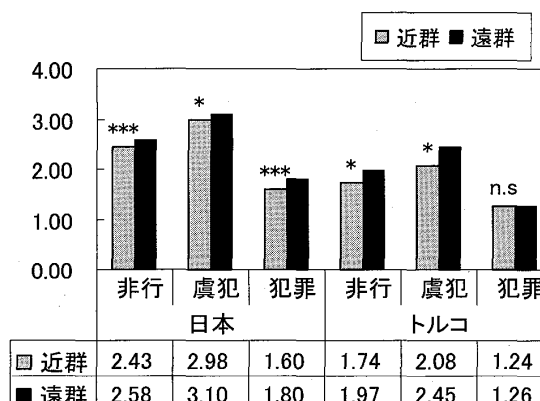


図6 母親との心理的距離の遠近群ごとに見た非行・虞犯・犯罪許容性

誌やアダルトビデオを見る』、『夜遅くまで遊ぶ』、『学校をサボる』、『異性の友達と二人で泊まる』など6項目の平均点を虞犯に対する許容性とした。さらに、『ちょっとしたものを万引きする』、『ケンカして怪我をさせる』、『人の物を盗む』、『覚醒剤などの薬物を使う』の4項目の平均点を犯罪に対する許容性とみなした。尺度の信頼性係数は、非行全体が $\alpha = .882$ 、虞犯が $\alpha = .882$ 、犯罪が $\alpha = .743$ であった。

概して、親に対する心理的距離が近い群において非行・虞犯・犯罪に対する許容性が低くなっており、親子関係の親密さが子どもの非行的態度を抑止することを示している。

ただし、非行・虞犯・犯罪に対する許容性自体は、日本よりもトルコの中高生において圧倒的に低い。そもそも、日本の中高生は非行や虞犯を容認する傾向が強く、その傾向は親との心理的距離の広がりにもなって、さらに助長されていると考えられる。

なお、図中のグラフ上の記号と略号は、2つの平均値の差が有意であるか否かを確認するために行ったt検定の結果を示したものであり、具体的には、\*\*\*が $p < .001$ を、\*\*が $p < .01$ を、\*が $p < .05$ を、+が $p < .10$ を、n.sがnon significantを意味する。t値および自由度は省略する。以降も同様である。

(1)—3 子どもの道徳意識と親子関係

子どもの道徳意識を以下の9項目を用いて測定した。各質問に対して「非常に悪いことと思う(1点)」～「まったく悪いこととは思わない(4点)」の4件法で尋ねた。したがって得点が低いほど道徳意識が高いことを示す。

図7と図8は、両親に対する心理的距離の遠—近群ごとに見た道徳意識得点の平均を国別に

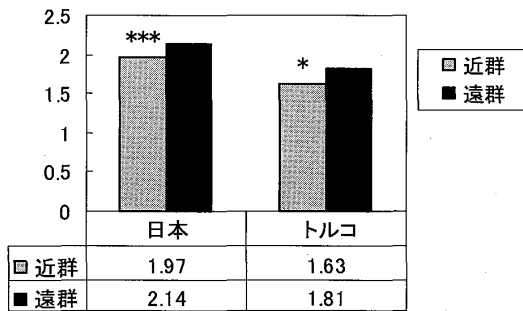


図7 父親との心理的距離の遠近群ごとにみた道徳意識（低いほど道徳的）

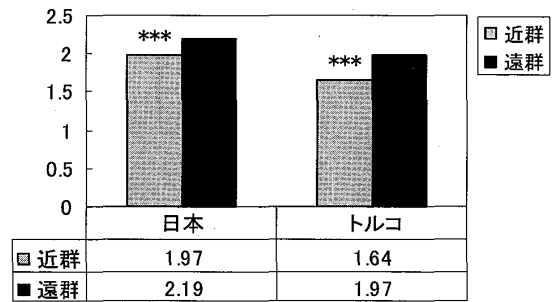


図8 母親との心理的距離の遠近群ごとにみた道徳意識（低いほど道徳的）

示したものである。ここでは、道徳意識を掌握するための指標として、『人にウソをつくこと』、『自分かってにふるまうこと』、『友達との約束を破ること』、『かんだガムを道ばたに捨てること』、『人を困らせること』、『困っている人を助けないこと』、『親のいうことをきかない』、『学校の先生のいうことをきかないこと』、『バスの中で2人分の座席を占領して座ること』の9項目の平均点を用いた。尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .832$ であった。

日本に比べてトルコの中高生の道徳意識は著しく高くなっているが、親に対する心理的距離が近い群において道徳意識が高くなる傾向は、両国に共通しており、親子関係の親密さが子どもの道徳意識の形成に寄与することを示唆している。

(1)－4 子どもの愛他性と親子関係

図9と図10は、両親に対する心理的距離の遠—近群ごとにみた愛他性得点の平均を国別に示したものである。ここでは、分析を繰り返し行った結果、愛他性を掌握するための指標として、場面想定法による2項目の平均点を用いた。具体的には、“山登りをしている途中に出会った人から水を飲ませてほしい…”という内容の依頼をされたときの反応を4件法で測定した。

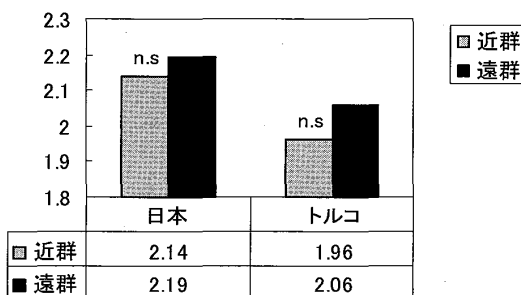


図9 父親との心理的距離の遠近群ごとにみた愛他性（低いほど愛他的）

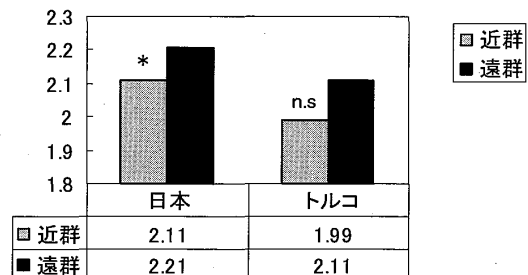


図10 母親との心理的距離の遠近群ごとにみた愛他性（低いほど愛他的）



得点が低いほど愛他的である。尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .726$ であった。

有意差が見られたのは、日本の母親に対する心理的距離の遠—近群間のみであった。しかし、いずれも親との心理的距離が近い群において愛他性が高くなっており、図中には掲載していないが、2カ国を統合して検定した結果は有意であった。したがって、親との心理的距離が近いことが、愛他性の高さに影響していると考えられる。

(1)—5 子どもの価値観と親子関係

図11と図12は、両親に対する心理的距離の遠—近群ごとにみた価値観の平均を国別に示したものである。ここでいう価値観は、「他者中心志向—自己中心志向」、「個人生活重視—社会生活重視」、「内的統制志向—外的統制志向」、「物質主義—精神主義」、「将来志向—現在志向」、「将来志向—現在志向」。

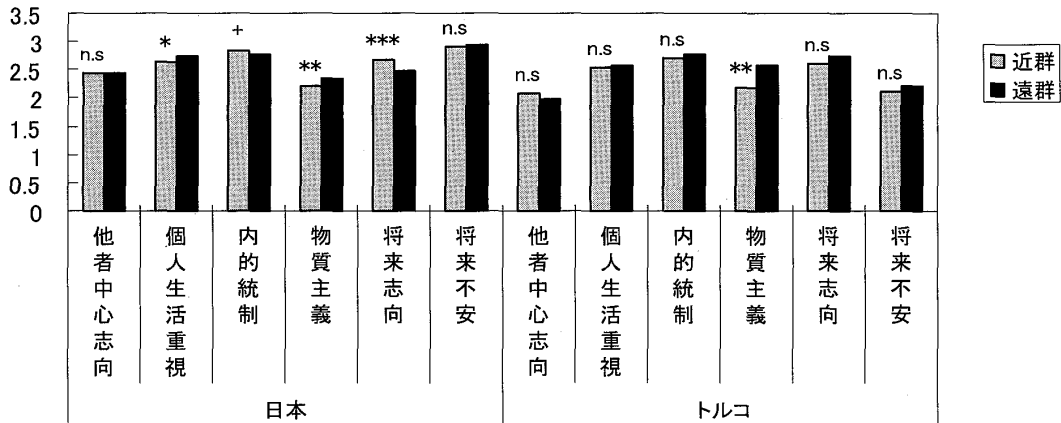


図 11 父親との心理的距離の遠近群ごとにみた価値観

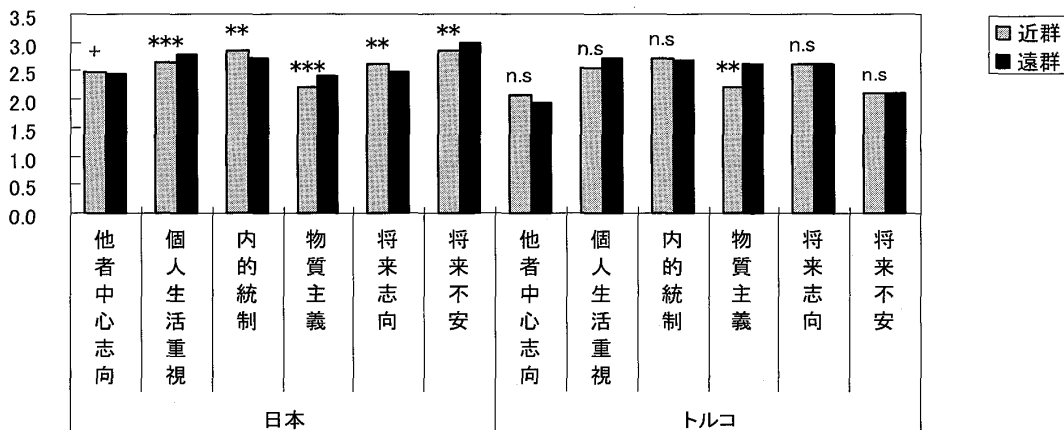


図 12 母親との心理的距離の遠近群ごとにみた価値観

「将来不安—将来楽観」の6つである。質問項目は価値観の種類ごとに2つずつ設けた。具体的には、『今が楽しければよい』など計12項目について「あてはまらない(1点)」～「あてはまる(4点)」の4件法で尋ねた。

これによると、トルコでは父母に対する心理的距離が近い群において精神主義が有意に高くなっている。しかし、それ以外の価値観は親子関係との関連が見られない。日本では、親に対する心理的距離と価値観の関連性が見られる。概して、親との心理的距離が近い群は、社会生活を重視し、内的統制志向が強く、精神主義的で、将来を志向するとともに、将来に期待する傾向がある。すなわち、親子関係の親密さが、子どもの望ましい価値観の形成に寄与していることがうかがえる。

#### (1)—6 子どもの恥意識と親子関係

図13と図14は、両親に対する心理的距離の遠—近群ごとにみた恥意識の平均を国別に示したものである。ここでいう恥意識とは、例えば、『ウソをつく』という行為をどのくらい恥ずかしいと思うかを「そうではない(1点)」～「そうである(4点)」の4件法で評定させるものである。

恥意識に関する25項目について、因子分析(重みなし最小二乗法, Kaiserの正規化を伴うプロマックス法による回転)を行った結果、3因子を抽出した。第一因子は、『努力が足りなくて目標が達成できなかったとき』、『自分で決めたことを守れなかったとき』、『悪いことをしたのにだまってそれをかくしているとき』、『自分が正しいと思ったことができなかったとき』など、自分の行為を自ら省みたときに恥ずかしいという気持ちを表す15項目で構成されており、「自律的恥意識」とした。

第二因子は、『親との約束をやぶってしまったとき』、『授業に遅れて先生にしかられたとき』、『家で自分だけ勝手なことをしてしかられたとき』など、他者を意識したときに恥ずかしいという気持ちを表す5項目で構成されており、「他律的恥意識」とした。

第三因子は、『自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき』、『自分だけが流行の物をもっていなかったとき』など、他者と異なる自分を恥ずかしいという気持ちを表す6項目で構成されており、「他者同調的恥意識」とした。

図13と図14をみると、日本とトルコに共通して、親に対する心理的距離が近い群において、自律的恥意識、他律的恥意識が高くなる傾向にある。子どもは、親との親密な関係を基盤にして、自己を内省する過程で、そして、他者との相互作用場面で恥ずかしさを感じるようになるものと考えられる。一方、他者同調的恥意識も親との心理的距離が近い群において高くなる傾

親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ

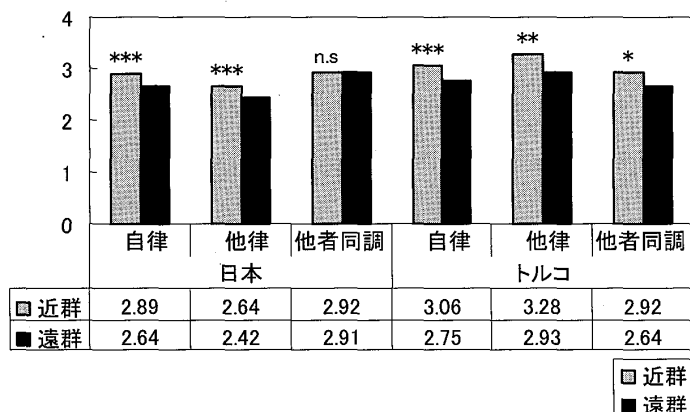


図 13 父親との心理的距離の遠近群ごとにみた自律的・他律的・他者同調的恥意識

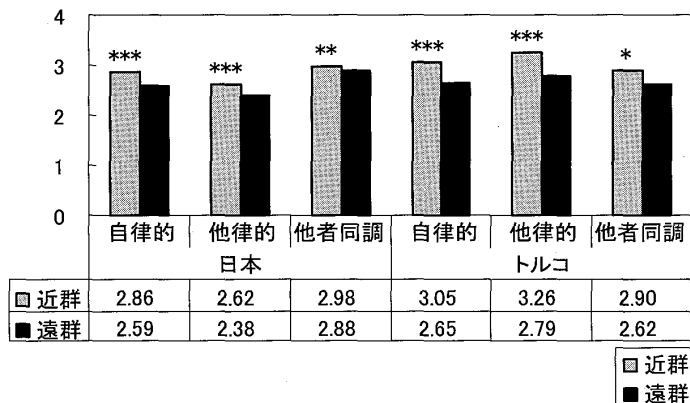


図 14 母親との心理的距離の遠近群ごとにみた自律的・他律的・他者同調的恥意識

向にあるが、その関連は他の2つの恥意識ほど顕著なものではない。

(1)ー7 子どもの非行許容性と他の変数との関連 (中高生調査のまとめ)

これまでに述べた分析結果により、親に対する子どもの心理的距離が、子どものさまざまな意識・態度に関連していることが確認された。概して、親との心理的距離が遠い群よりも近い群において、非行・虞犯・犯罪を許容せず、道德意識が高く、愛他性がやや高い傾向にあり、望ましい価値観と恥じらいの気持ちを形成するようになると言えよう。では、子どもの非行的態度と他の諸変数とのあいだにはどのような関連性があるのだろうか。

表5は、中高生の非行・虞犯・犯罪に対する許容性と他の意識や態度との関連性を示したも

表5 非行許容性と他の変数との関係

(値は相関係数)

	道徳意識	愛他性	自律的恥	他律的恥	他者同調恥	父との距離	母との距離
非行許容性	.554 **	.133 **	-.421 **	-.514 **	-.104 **	.385 **	.355 **
虞犯許容性	.525 **	.137 **	-.388 **	-.507 **	-.088 **	.375 **	.325 **
犯罪許容性	.429 **	.094 **	-.366 **	-.354 **	-.104 **	.285 **	.304 **

\*\*は  $p < .01$  を, \*は  $p < .05$  を示す。

のである。これによると、非行・虞犯・犯罪許容性は、道徳意識、自律的恥意識、他律的恥意識、父親との心理的距離、母親との心理的距離と強い相関関係にある。また、愛他性、他者同調的恥意識とは、弱い相関関係にある。すなわち、道徳意識、愛他性、自律的・他律的・他者同調的恥意識が高いほど、非行的態度を抑制する傾向にあることが示唆される。

これらの諸変数は、先に述べたとおり、全て親との心理的距離の近さを基盤にして形成されていると考えられる。したがって、子どもから見た親子関係の良好さが、子どもの意識や態度に肯定的な影響を与えるととともに、これらを媒介して、非行的な態度が抑制されるものと思われる。

## (2) 親子関係と子どもへの意識・態度 (親の視点から)

### (2)ー1 親から見た親子関係

親から見た親子関係の良否を掌握するために、子どもに対する心理的距離を測定した。心理的距離尺度15項目(4件法)について、因子分析(重みなし最小二乗法, Kaiserの正規化を伴うプロマックス法による回転)を行った結果、3因子を抽出した。第一因子は、『子どもはなにかと私に相談する』、『子どもは私を尊敬している』、『子どもには期待している』、『子どもは私を頼りにしている』など8項目で構成されており、「認知的心理距離」とした。第二因子は、『子どもに人に親切にすることの大切さを教えている』など2項目で構成されており、「しつけ」因子とした。第三因子は、『私は子どもを愛している』、『子どもは私の宝である』の2項目で構成されており、「情緒的心理距離」とした。

本研究における親を対象とする調査では、子どもとの心理的距離のほかにも、子どもに対する愛他性のしつけに関する質問も実施しているので、ここでは、第二因子を除く、「認知的心理距離」8項目と「情緒的心理距離」2項目のそれぞれの平均点を親から見た親子関係の良否を把握するための指標として用いた。尺度の信頼性係数は、認知的心理距離が  $\alpha = .842$ 、情緒的心理距離が  $\alpha = .510$  であった。

表6は、子どもに対する心理的距離の平均と標準偏差を国別・父母別に示したものである。

表6 子どもに対する心理的距離の平均(標準偏差)

		認知的心理距離	情緒的心理距離
日本	父親	2.37 (.46)	1.29 (.48)
	母親	2.30 (.41)	1.21 (.42)
	計	2.33 (.44)	1.25 (.45)
トルコ	父親	1.51 (.44)	1.18 (.44)
	母親	1.46 (.37)	1.13 (.41)
	計	1.48 (.41)	1.16 (.42)
全体		1.99 (.59)	1.21 (.44)

※ 値が小さいほど心理的距離が近いことを示す

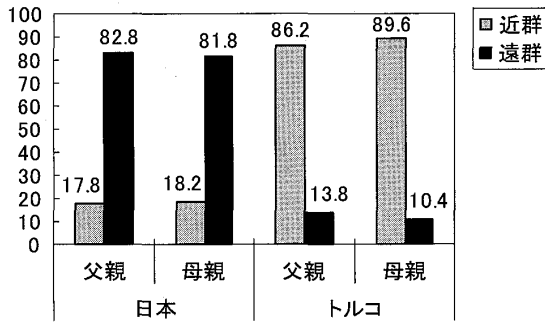


図15 子どもとの認知的心理距離 (%)

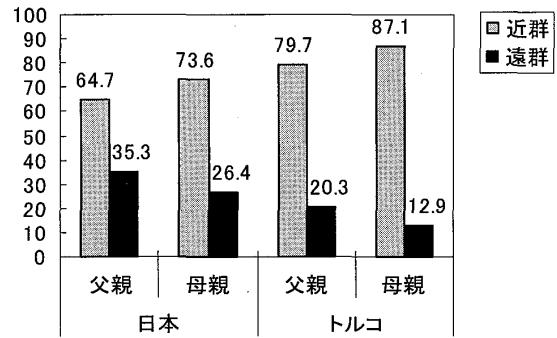


図16 子どもとの情緒的心理距離 (%)

子どもとの認知的心理距離は、日本よりもトルコのほうがはるかに近い。これは、親から見た親子関係がトルコにおいて親密であること、日本において希薄であることを示している。一方、情緒的心理距離では、両国の差はあまりない。子どもを大切に可愛がる気持ちは日本の親もトルコの親とさほど変わらないようである。

次に、調査対象者全員(父母)について、子どもに対する認知的心理距離得点と情緒的心理距離得点を算出し、それぞれの平均点を境に近群と遠群に分割した。図15は子どもに対する認知的心理距離の遠—近群の割合を、図16は情緒的心理距離の遠—近群の割合を国別・父母別に示したものである。

トルコでは、子どもに対する認知的心理距離が近い者の割合が9割近くに達しているのに対して、日本では8割強の親が子どもとの認知的心理距離が遠くなっている。情緒的心理距離は、トルコの親が8割前後、日本の親も約6~7割が近くなっている。両国とも、子どもとの情緒的距離は、父親よりも母親のほうが近群の割合が高くなっている。

(2)―2 親子関係と子どもの非行に対する許容性

図17と図18は、子どもに対する心理的距離の遠―近群ごとにみた虞犯・犯罪・非行に対する許容性を国別・父母別に示したものである。

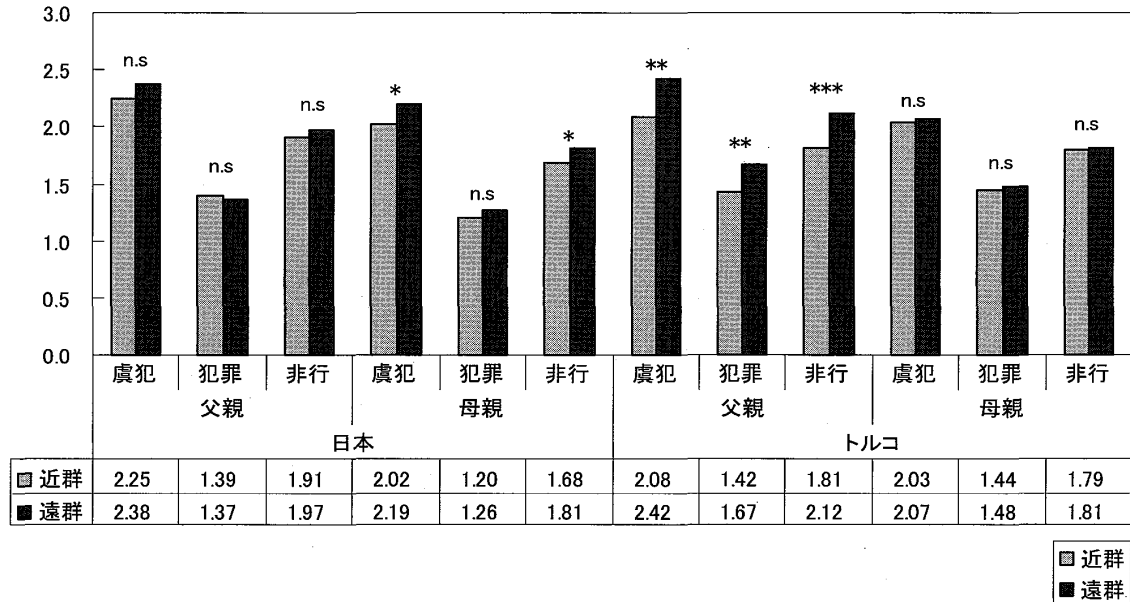


図17 子どもとの認知的心理距離の遠近群ごとにみた子どもの虞犯・犯罪・非行に対する許容性

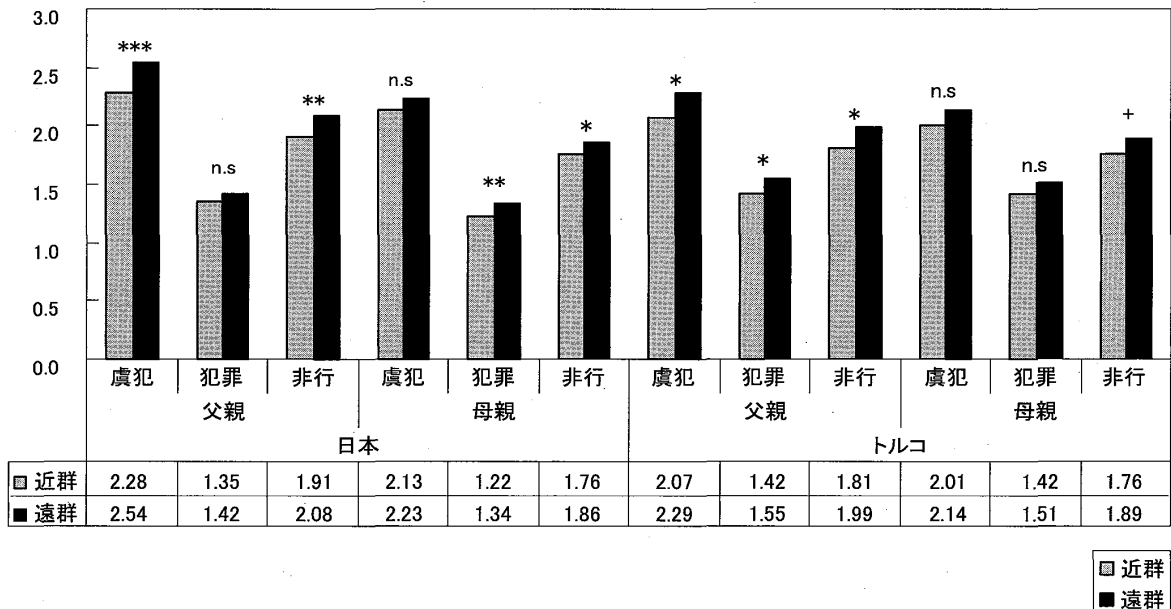


図18 子どもとの情緒的距離の遠近群ごとにみた子どもの虞犯・犯罪・非行に対する許容性

認知的心理距離においては、日本の母親とトルコの父親は、子どもとの距離が近い群で非行・虞犯に対する許容性が低かった。日本の父親も平均値で見るとそのような傾向が見受けられるが、有意差はなかった。一方、トルコの母親はそのような傾向がみられなかった。

情緒的心理距離においては、トルコの母親を除いて、子どもとの距離が近い群で虞犯・犯罪・非行に対する許容性が低かった。

これらの結果は、トルコの母親を除いて、概ね、子どもとの心理的距離が近い親ほど、子どもの非行・虞犯を許容しない傾向があることを示唆するものである。

なお、ここでいう非行・虞犯・犯罪は、中高生を対象とする調査で用いたのと同じ項目を用いて、自分の子どもと同世代の子どもたちが、そのようなことをしたらどの程度悪いことだと思うかを4件法で尋ねる形式であった。尺度の信頼性係数は、非行許容性が $\alpha = .817$ 、犯罪許容性が $\alpha = .708$ 、虞犯許容性が $\alpha = .811$ であった。

(2)一3 親子関係と道德意識

図19と図20は、子どもに対する心理的距離の遠一近群ごとにみた道德意識得点の平均を国別、父母別に示したものである。ここでいう道德意識とは、子どもの振る舞いに関する道德意識を示す。具体的には、中高生を対象とする調査で使用したのと同じ道德意識尺度9項目を用いて、自分の子どもと同世代の子どもたちが、そのようなことをしたらどの程度悪いことだと思うかを4件法で尋ねる形式であった。尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .853$ であった。

概して、日本とトルコに共通して、子どもに対する認知的・情緒的心理距離が近い群において道德意識が高くなる傾向がある。つまり、子どもとの関係が親密である親は、子どもの振る舞いに関する道德意識の程度が高いことを示している。

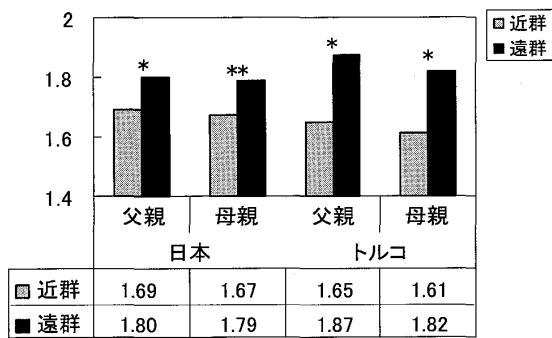


図19 子どもとの認知的距離の遠近群ごとにみた道德意識 (低いほど道德的)

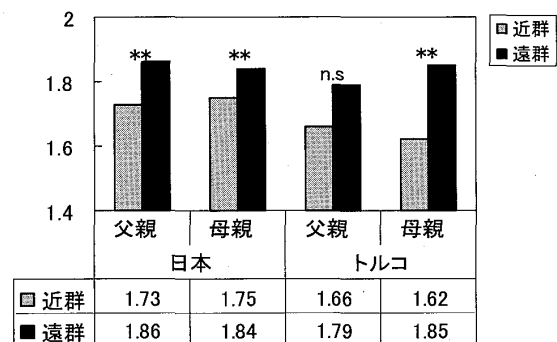


図20 子どもとの情緒的心理距離の遠近群ごとにみた道德意識 (低いほど道德的)

(2)―4 親子関係と愛他性に関するしつけ

図 21 と図 22 は、子どもに対する心理的距離の遠―近群ごとにみた「愛他性に関するしつけの程度」の平均を国別、父母別に示したものである。ここでいう愛他性に関するしつけとは、『バスや電車の中でお年寄りに席をゆずること』など 4 項目に対してどの程度教えているかを 4 件法で問うものであった。尺度の信頼性係数は  $\alpha = .807$  であった。

トルコと日本に共通して、認知的心理距離の近群は遠群に比べて、子どもの愛他性に関するしつけの程度が非常に高い。これは、子どもとの認知的心理距離の近さが、具体的なしつけや働きかけを伴うものであることを示唆する。

一方、情緒的心理距離の結果は両国で異なる。日本の親は、子どもとの情緒的心理距離が近い群で愛他性に関するしつけの程度が高いが、トルコではそのような傾向がみられない。トルコでは子どもとの情緒的心理距離の遠近にかかわらず、愛他性に関するしつけの程度が非常に高いようである。

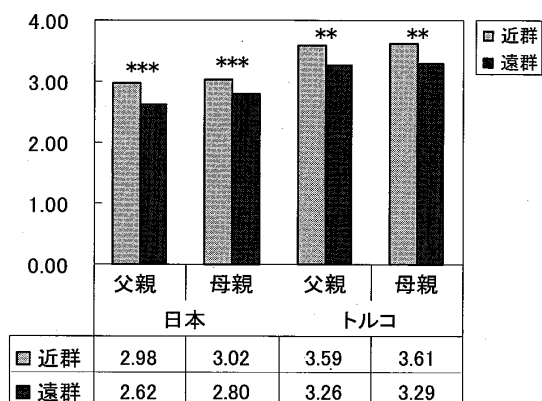


図 21 子どもとの認知的心理距離の遠近群ごとにみた「愛他性に関するしつけの程度」

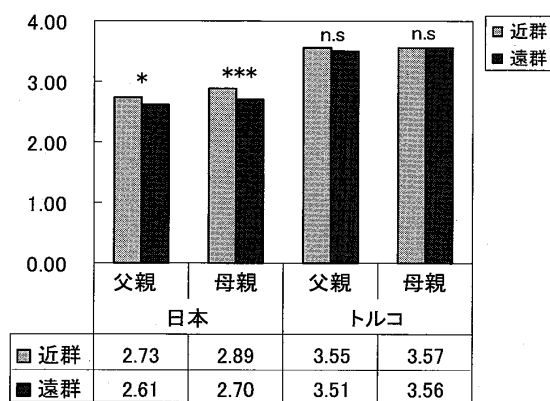


図 22 子どもとの情緒的心理距離の遠近群ごとにみた「愛他性に関するしつけの程度」

(2)―5 子どもとの心理的距離と他の変数との関連 (父母調査のまとめ)

これまでに述べた分析結果により、子どもに対する心理的距離が、親の子どもに関する意識・態度に影響していることが確認された。

概して、子どもとの認知的・情緒的心理的距離が遠い群よりも近い群のほうが、子どもの非行・虞犯を許容せず、子どもの振る舞いに関する道德意識の程度が高い傾向にある。愛他性に関するしつけの程度は、認知的心理距離の近い群が遠い群よりも高いといえる。

では、認知的心理距離と情緒的心理距離は、親の（子どもに関する）他の意識や態度に対して同じように影響しているのだろうか。あるいは影響力の程度が異なるのだろうか。



表7は、親から見た子どもに対する認知的心理距離および情緒的心理距離と、親の子どもに関する他の意識や態度との関連を示したものである。

これによると、概ね、認知的心理距離、情緒的心理距離ともに、子どもの虞犯に対する許容性、子どもの非行に対する許容性、子どもの振る舞いに関する道德意識、子どもの愛他性に関するしつけの程度と相関関係にある。ただし、相関の強さは、一貫して、情緒的心理距離よりも認知的心理距離のほうが大きい。すなわち、子どもを大切に可愛がること、そして子どもとのあいだに実際的かつ肯定的な相互作用を交わすことが、子どもに関する親の他の意識や態度にも好ましい影響を及ぼすと考えられるし、それが後者すなわち認知的心理距離の近さにおいて顕著であることを示唆する。

表7 親から見た子どもに対する心理的距離と他の変数との関係 (値は相関係数)

		子どもの虞犯 への許容性	子どもの犯罪 への許容性	子どもの非行 への許容性	子どもの振る 舞いに関する 道德意識	子どもへの愛 他性に関する しつけの程度
父親	認知的心理距離	.255 **	.035	.198 **	.178 **	-.578 **
	情緒的心理距離	.159 **	.088 *	.151 **	.130 **	-.130 **
母親	認知的心理距離	.160 **	-.096 **	.097 **	.234 **	-.605 **
	情緒的心理距離	.055	.044	.058	.144 **	-.142 **
全体	認知的心理距離	.197 **	-.023	.155 **	.205 **	-.592 **
	情緒的心理距離	.117 **	.075 **	.116 **	.138 **	-.141 **

### (3) まとめと総合的考察

本研究の結果は、子どもから見た親子関係の親密さが子どもの道德意識、恥意識、愛他性、価値観に肯定的な影響を与えるとともに、自らの非行的態度の抑止に寄与していることを示唆する。一方、親から見た子どもとの関係の親密さも親の（子どもに関連した）道德意識や愛他性に関するしつけを促すとともに、子どもの虞犯や非行を許容しない態度の形成に貢献することを示した。

すなわち、親子の心理的距離の近さが、子どもの健全な意識や態度を育むとともに、非行や犯罪への抑制要因として有効に機能している可能性を親子双方の観点から確認することができたと言えよう。

国際比較の観点では、トルコに比べて日本は、親子が互いに心理的に距離を置いており、それが中高生の意識や態度にあまり好ましくない影響を与えていることが示唆された。ただし、親から見た子どもとの心理的距離のうち、情緒的心理距離はトルコの親ほどではないが、かな

り近くなっていた。日本の親も子どもを大切に可愛がることを忘れていないのだと、安堵する結果であったが、これは見方を変えれば、日本の親は子どもを可愛がるだけで、親としての働きかけやしつけを全うしていないのではないのか、という懸念を抱かせるものでもある。情緒的心理距離とともに、子どもに対する認知的心理距離を近づける努力が日本の親、ひいては社会全体に求められている課題であると言えよう。

### 【文献】

- 松井 洋・中里至正・片山美由紀・中村 真・堀内勝夫 2005, 「非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究」, (財)社会安全研究財団『平成 15 年度研究助成報告書』, 43-56.
- 中村 真 他 2002, 「親子関係に関する国際比較研究 (2) —親子間の心理的距離の比較—」, 『日本心理学会第 66 回大会発表論文集』, 160.
- 中村 真 他 2004, 「恥意識の行動抑制力に関する研究 (3) —親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響—」, 『日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集』, 520-521.
- 中村 真 他 2005, 「親子の心理的距離と恥意識の関係」, 『日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集』, 99-100.
- 中里至正・松井 洋 1997, 『異質な日本の若者たち 世界の中高生の思いやり意識』, ブレーン出版
- 中里至正・松井 洋 1999, 『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社
- 中里至正・松井 洋 2003, 『日本の親の弱点』, 毎日新聞社
- 中里至正 他 2003, 「非行抑制要因に関する社会心理学的研究」, 『平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究結果報告書』
- 中里至正 他 2005, 「恥意識の行動抑制力に関する社会心理学的研究」, 『平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究結果報告書』

- 1) 本研究は、(財)社会安全研究財団より研究助成を受けた (代表 中村真)。本論文はこの財団への研究報告書をもとにまとめたものである。
- 2) 本論文は、本論文の著者の他に、中里至正 (東洋大学) と永房典之 (東洋大学大学院) との共同研究の成果である。